

*Raffiné Journal vol.11*

俳優が消える瞬間

人が表現に入るとき、  
そこに立つのは、  
その人ではなくなることもある。

名前も輪郭も一度ほどけ、  
ただ一つの人物が  
静かに現れる瞬間がある。

それは演技というより、  
存在が入れ替わる  
小さな出来事のように見える。

今日、二つのドラマを続けて見た。

どちらにも同じ俳優さんが出ていた。

一つは裏社会の男。  
もう一つは下町の魚屋。

世界も空気も、人物の性格も、まったく違う。

普通なら、どこかに俳優本人の輪郭が残る。  
「あ、同じ人だ」と感じる瞬間がある。

けれど今回は、それがなかった。

見ているあいだ、  
そこにいたのは俳優ではなく、  
ただその役の人物だった。

裏社会の男が、  
感情を露わにして言葉を吐き出す場面があった。

声は荒れ、言葉は整っていない。  
勢いのままに溢れているようだった。

けれどそこに、  
作られた乱れはなかった。

整っていないはずの言葉が、  
その人物の中からそのまま外に出てきている。

演技としての操作が見えないまま、  
一人の人間が成立していた。

そのあと、別のドラマを見た。

そこでは同じ俳優さんが、  
下町の魚屋として立っていた。

声の調子も、身体の空気も、  
先ほどの人物とはまったく違う。

けれどやはり、  
俳優としての輪郭は現れなかった。

そこにいたのは、  
その町で時間を重ねてきた  
一人の男だった。

二つの作品を見終わってから、  
ふと気づいた。

そういえば、同じ俳優だった。

見ているあいだ、  
そのことを一度も考えていなかった。

表現が成立するとき、  
人は何かを「やっている」ようには見えない。

内側の構造と外側の行為が分離せず、  
そのまま一つの流れとして現れる。

そのとき、  
俳優という名前は機能を失う。

観客の前に残るのは、  
ただ一人の人物だけになる。

消えているのに、いちばん強く残る。



Raffiné Journal vol.11  
2026

美学思想家  
古川玲奈

発行：Raffiné